



慶應義塾大学ビジネス・スクール

取引と仕訳

5

1 期中手続

前回のノートでは、簿記一巡の手続を簡単に説明した。このノートでは、簿記一巡の手続を詳しく見ていくこととする。

企業会計の特徴は、ある期間に属する損益を計算する点にある。損益を計算するための期間のことを会計年度（会計期間、財政年度）と呼ぶ。通常、会計年度としては1年が採用される。わが国においては、国の財政年度にあわせて、4月1日から3月31日までの1年間を会計年度とする企業が多い。一般に、会計年度の始めを期首、途中を期中、終わりを期末という。期中には通常の手続を行ない、期末には決算と呼ばれる特別な手続を行なう。決算の目的は、期末時点の財政状態を表わす貸借対照表と、その会計年度の経営成績を表わす損益計算書などの財務諸表を作成することである。

期中においては、企業のビジネス活動の中から、会計上の取引にあたるものを見抜いてこれを記録する。具体的には、**取引を仕訳帳** または伝票にデータ入力し、それを総勘定元帳というデータベースに書き写すことになる。仕訳帳や伝票に取引をデータ入力する手続を仕訳と呼び、仕訳した結果を総勘定元帳に書き写す手続を転記と呼ぶ。この手続は、期中に常時行なわれる手続なので、期中手続と呼ばれる。期中手続を図式化すると図1のようになる。

本ケースは、慶應義塾大学ビジネス・スクール准教授太田康広が複式簿記の演習問題として作成した。ケース中の企業は架空のものである。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール(〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp)。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright© 太田康広 (2009年1月作成)

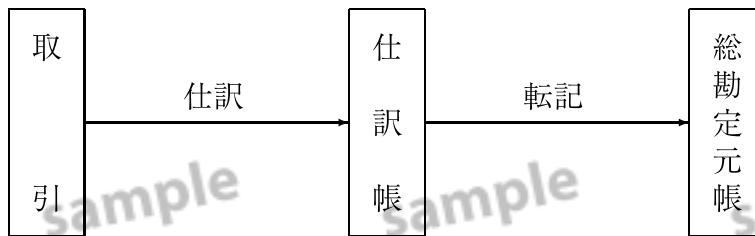


図 1 期中手続

2 会計上の取引

10 期中において会計記録を取る場合、まず最初に行なうべきことは、企業に関連するできごとのうち、会計上の取引（簿記上の取引）にあてはまるものを選び出すことである。ここで、取引（transaction）とは、特定の企業の資産・負債・資本・収益・費用に影響を及ぼす事象（イベント）のことである。

15 ただし、厳密にいうと、これでは会計上の取引というコンセプトの説明や定義になっていない。あるイベントを会計上の取引として選び出すと、その結果として、会計記録が行なわれ、企業の資産・負債・資本・収益・費用に影響を及ぼすことになる。会計記録が必要なイベントを取引と呼び、取引があったときは会計記録が必要というのでは、同義反復である。

20 より一般的には、どういうイベントを取り出して会計記録を準備したらしいのかというルールを示さなければ、会計上の取引をきちんと定義したことにはならないだろう。そして、実は、このルールを示すことが大変にむずかしい。

歴史的にいっても、会計上の取引とみなされてきたイベントは一定していない。新しい会計ルールができると、従来、取引とみなされてこなかったイベントが、新しく会計上の取引になったりする。したがって、何が会計上の取引になるのかを正確に知るためにには、現在の会計ルール（会計基準）をすべて知る必要が出てくる。結局のところ、会計上の取引とは、現在効力を持っている会計基準にしたがうと会計上記録が必要になるイベントのことをいうとしかいいようがない。ここで、すべての会計基準について解説するわけにはいかないので、今は、原則的なルールを示すにとどめておこう。

30 まず、いかなる場合でも、会計上の取引とみなされるイベントがある。現金や預金が増えたり減ったりした場合は、つねに会計上の取引に該当する。いいかえると、キャッシュフローが生じたときには、それはつねに会計上の取引に該当するので、それを記録しなければならない。また、企業外部の第三者とのあいだで、財貨・サービスをやりとりしたり、それを使ってしまったりした場合にも、会計上の取引になる。要するに、キャッシュフローがあるか、財貨・サービスのや

sample

sample

sample

sample

sample

りとりがあったときには、原則として会計上の取引になるということである。このルールにはいろいろ例外があるのだが、それはこれからのお説明や記帳訓練を通じて少しづつ身につけていくことになる。

この会計上の取引というコンセプトは、日常用語でいう取引とは微妙にズレている。まず、不動産の賃貸借契約を結ぶという行為は、常識的には取引といつていいだろうが、契約を結んだだけでは、キャッシュフローが生じるわけではなく、財貨・サービスのやりとりもないのに、通常は会計上の取引に該当せず、したがって仕訳も行なわない¹。実際にその不動産を使いはじめたり、賃借料を支払ったときにはじめて会計上の取引になるわけである。他方、火災が生じて、工場設備などが消失した場合、常識的には取引に該当しないが、会計上は、取引としてあつかう。工場設備の帳簿価額を切り下げる必要があるため、会計上の記録を修正する必要があるからである。このように、会計上の取引と日常用語でいう取引は、たがいに重なりあう部分を持つつも、完全に同じ概念でないことには注意が必要である。

5

10

15

20

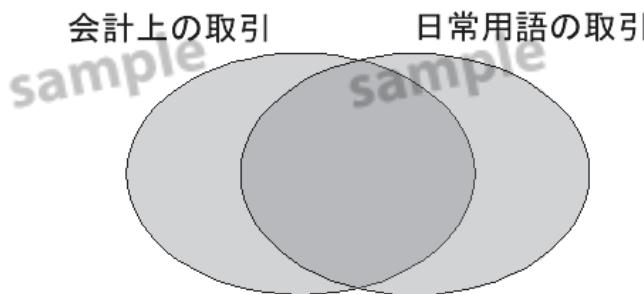


図 2 会計上の取引と日常用語の取引

3 仕訳

会計上の取引に該当するイベントが特定できたら、これを会計上、記録しなければならない。複式簿記システムへのデータ入力のことを仕訳 (journal entry) といい、仕訳を準備することを「仕訳を切る」という。図 1 で示したように、古くは、仕訳帳 (journal) という帳簿を準備して、取引発生順に仕訳を記録していた。しかし、企業が大きくなってくると、別の人や別の部署でも仕訳が切れるよう、カード上の伝票が使われるようになる。現代においても、仕訳帳や伝票を利用した仕訳記録は皆無ではないが、コンピュータ上の会計情報システムが利用されることが多いだろう。この場合は、コンピュータ・ソフトウェアへのデータ入力が仕訳に相当する。

25

30

¹ ただし、すべての契約締結が、会計上の取引にならないわけではない。たとえば、特定の条件を充たすリース契約は会計上の取引になる。また、金融派生商品（デリバティブ）の売買も契約締結時に取引とされる。

sample

sample

sample

sample

sample

仕訳は、4つの項目から構成される。借方科目、借方金額、貸方科目、貸方金額である。これに加えて、取引が行なわれた日付も書くことが多いので、実際には、5つの項目を記入することが多い。具体的には、

5 日付 (借) 借方科目 借方金額 (貸) 貸方科目 貸方金額

という形式になる。仕訳帳を使う場合には、仕訳の下に、簡単な取引の説明を添える。この取引の説明を小書きといふ。

10 借方科目と貸方科目には、現金、借入金など、勘定科目 (account: a/c) と呼ばれる項目名が記載される。会計では、これら勘定科目ごとに価値の変動を記録することで、企業のビジネス活動の全体像を把握しようとする。勘定科目は、こうした記録の単位となる項目であって、原則として、資産、負債、資本、収益、費用のいずれかに属している。

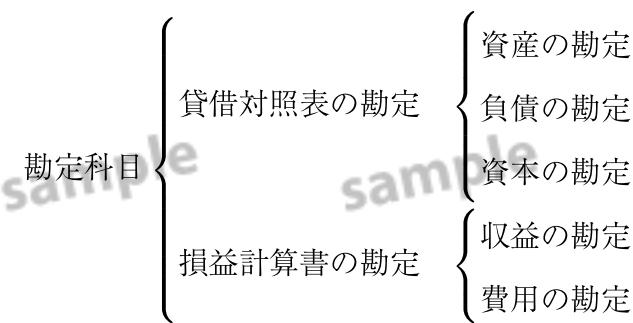


図 3 勘定科目とその種類

20 企業外部に公開される財務諸表上の報告項目の名称は、各種の規則で決まっているが、企業内部でどのような勘定科目を使うかは、企業の自由である。管理会計上の必要に応じて、きわめて詳細な勘定科目が利用される場合も多い。たとえば、特定の工場の特定の製造ラインで、特定の製品を製造している場合の、特定の工程で生じた、原材料の過剰な費消を表わす科目などが準備される場合もある。しかし、学習上は、標準的な勘定科目を利用する。いくつか例を挙げておこう。

25 資産 現金、預金、売掛金、受取手形、有価証券、商品、製品、原材料、備品、設備、建物、土地など。

負債 買掛金、支払手形、借入金、社債など。

30 資本 資本金、資本剰余金、繰越利益剰余金など。

収益 売上、受取利息、受取配当金、受取地代など。

費用 売上原価、賃借料、給料、減価償却費、支払利息、支払地代など。

sample

sample

sample

sample

sample

この段階で、上記の勘定科目のすべての意味がわかる必要はない。個々の科目については、必要に応じて、これから徐々に解説していくことになる。ここでは、勘定科目名を暗記することよりも、仕訳に関する一般的なルールを身につけるほうが大切である。

仕訳の一般的なルールを理解するために、ストックとフローの関係に関する式を思い出そう。一般に、期首のストックに、期中に増えた分を加え、期中に減った分を引けば、期末のストックになる。

$$(期首ストック) + (インフロー) - (アウトフロー) = (期末ストック)$$

会計でいえば、期中に資本取引（株主との取引）がないとき、期首資本に、現在までに生じた収益を加えて、現在までに生じた費用を引けば、現在の資本になるということである。

10

$$(期首資本) + (収益) - (費用) = (現在の資本)$$

ここで、現在の資本は、現在の資産と負債の差額であるから、

$$(現在の資本) = (資産) - (負債)$$

15

である。以上の式を整理すると、

$$(資産) + (費用) = (負債) + (期首資本) + (収益) \quad (\text{試算表等式})$$

となる。これを試算表等式と呼んだことを思い出そう。試算表等式は、期末資産が借方（左側）にくるようにし、そのほかのすべての項目がプラスになるように配置されている。試算表等式を概念的に表わすと次のとおりである。

20

この試算表等式は、期末にかぎらず、つねに成り立っている。逆にいうと、どんな仕訳もこの等式を充たすように行なわれる必要があるということである。ここで、資産の額が増えた場合、試算表等式が成立するためには、増えた資産の額とトータルで同じ額だけ、別の資産が減少するか、負債が増加するか、期首の資本が増加するか、収益が増加するかのいずれか、または、これらの組み合わせが生じなければならない。反対に、資産の減少は、別の資産の増加、費用の増加、負債の減少、資本の減少とセットで処理されるはずである。ここで、考えられる組み合わせをすべてあげておこう²。なお、この一覧表を丸暗記する必要はないので、心配はいらない。

25

資産の増加 資産の減少、負債の増加、資本の増加、収益の発生

資産の減少 資産の増加、負債の減少、資本の減少、費用の発生

30

² これは、原理的にありうるすべての組み合わせであって、現在の会計ルールの下では認められていないもの、稀にしか生じない組み合わせも含まれている。

残高試算表

借方	貸方
	負債
資産	期首資本
費用	収益

図 4 残高試算表

負債の増加 資産の増加、負債の減少、資本の減少、費用の発生

負債の減少 資産の減少、負債の増加、資本の増加、収益の発生
15

資本の増加 資産の増加、負債の減少、資本の減少、費用の発生

資本の減少 資産の減少、負債の増加、資本の増加、収益の発生

収益の発生 資産の増加、負債の減少、資本の減少

費用の発生 資産の減少、負債の増加、資本の増加
20

この一覧表は、少し見にくいので、原理的に起こりうる組み合わせを図 5 のようにまとめておこう。この図は、「取引の八要素」を表わす図として知られている。

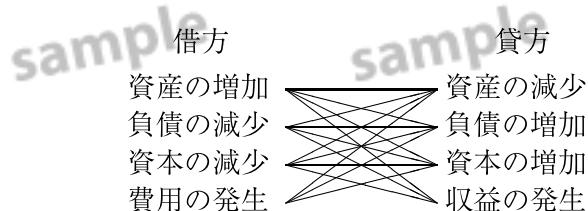


図 5 取引の八要素

sample

sample

sample

sample

sample

資産

負債

(増加)

(減少)

(減少)

(増加)

5

資本

(減少)

(増加)

10

費用

収益

(発生)

(取消)

(取消)

(発生)

15

複式簿記を身につけるためには、このルールを完全に覚えなければならない。ただし、「資産の増加は、えーと、借方...」というような暗記の仕方は現実的ではない。はじめは、現金に関するルール、

現金が増えたら借方、現金が減ったら貸方。

になじんでおき、このルールから類推するのがいいと思う。ただ、このルールだけでは、現金が出てこない取引は記帳できないことになる。包括的な仕訳のルールは、頭の中で残高試算表を思い浮かべ、

増加の場合は残高試算表と同じ側、減少の場合は残高試算表と反対側。

と憶えるとよい。

ただし、一々意識して仕訳を切っているようではダメである。仕訳のトレーニングを積んで、最終的には、半ば無意識のうちに自動的に仕訳が切れるところまで持っていくかなければならない。仕訳は、会計記録のためのデータ入力形式であるだけでなく、もっと一般的にいえば、人間がビジネス活動の性格を認識する形式でもある。ある商取引の本質を考えるときに、頭の中で仕訳を思い浮かべられるかどうかで、理解の深さが格段にちがってくるだろう。テレビの経済ニュー

20

25

30

スを聞きながら、「ああ、この取引のスキームは、こういうことなのね」と、脳裏で無意識に仕訳が切れるまで練習しよう。

しかし、その域に達するためには、血の滲むようなトレーニングが必要というわけでは全然ない。ちょっとした数の仕訳ドリルをこなせば身につくはずである。数時間程度の仕訳練習で、一生もののビジネス取引分析能力が身につくのであるから、これはかなり割のいい投資だといえる。

4 仕訳の例

ここでは、前回までに、出てきた仕訳の例を挙げておく。ここでは記録貨幣単位を円としよう。
10 また、日付と小書きは省略する。前回のノートでは、現金が増えたら借方、現金が減ったら貸方というルールで仕訳を切ったが、このルールが一般的な仕訳のルールの一部になっていることを確認しよう。ある項目が増えるときは残高試算表と同じ側、減少の場合は残高試算表と反対側に記録する。

15 1. 資本金 100,000,000 円の現金出資を受けて、日吉運送店株式会社を設立した。

(借)	現	金	100,000,000	(貸)	資	本	金	100,000,000
-----	---	---	-------------	-----	---	---	---	-------------

これは、現金という資産の増加と資本金という資本の増加の組み合わせである。

20 2. 綱島銀行から 50,000,000 円の現金融資を受けた。

(借)	現	金	50,000,000	(貸)	借	入	金	50,000,000
-----	---	---	------------	-----	---	---	---	------------

これは、現金という資産の増加と借入金という負債の増加の組み合わせである。

25 3. トランクを賃借し、賃借料 5,000,000 円を現金で支払った。

(借)	賃	借	料	5,000,000	(貸)	現	金	5,000,000
-----	---	---	---	-----------	-----	---	---	-----------

これは、賃借料という費用の発生と現金という資産の減少の組み合わせである。

30 4. 賃借したトランクに保険をかけ、保険料 1,000,000 を現金で支払った。

(借)	支	払	保	険	料	1,000,000	(貸)	現	金	1,000,000
-----	---	---	---	---	---	-----------	-----	---	---	-----------

これは、支払保険料という費用の発生と現金という資産の減少の組み合わせである。

5. 元住吉工務店からの依頼で資材を運搬し、代金 7,000,000 円を現金で受け取った。

(借) 現 金 7,000,000 (貸) 売 上 7,000,000

これは、現金という資産の増加と売上という収益の増加の組み合わせである。

5

なお、仕訳帳の例を図 6 に示しておく。現代においては、仕訳帳は、伝票やコンピュータ・ソフトウェアへの入力にとってかわられているため、あまり利用されることがない。

仕訳帳					1
日付	摘要	要	元丁	借方	貸方
4 4	(現 金)		1	100,000,000	
	(資本金)		3		100,000,000
	出資により会社設立				
6 12	(現 金)		1	50,000,000	
	(資本金)		2		50,000,000

図 6 仕訳帳

ここで、元丁というのは、総勘定元帳のページ数を意味する。また、「出資により会社設立」という部分が小書きにあたる。

10

15

20

25

30

不許複製

慶應義塾大学ビジネス・スクール

三美印刷 2009.1 P150